

光葉会新生顛末記

——「国語教育会」に期待する——

光葉会会長 小山 清

一
少昔の話になるが、昭和三十五年（一九六〇）八月五日は、朝から真夏の太陽が照りつけて暑かった。格別の冷房設備のない、東千田町の教育学部一一一号教室は、開放した窓から、セミの鳴き声がしきりに聞こえていた。壇上には入れ替わり立ち替わり、若き国語教師が進み出て、教育現場の実践を報告し、日ごろの研究を発表した。前から二三列目の中央には、清水文雄先生と野池潤家先生とが座っておいでだった。

百名を越える会員が参加した、第一回国語科光葉会研究会は、新興の意気と熱気とにあふれていた。ちょうど私が学部四年生のときであり、先輩に負けないようにがんばろうと、決意したことを憶えている。教育学部国語科卒業生の会は、会長の清水文雄先生によって、「光葉会」と名づけられていた。そして、第一回研究会に先立って、昭和三十五年二月、すでに機関誌の『国語教育研究』創刊号を発売していたのである。

二
烏兔匆匆、それから四十年を閲する間に、母校の広島大学教育学部は、大小幾度かの改変に遭遇することになった。一つは、教員養成の看板を降ろしたときであり、もう一つは、東広島市への移転であったろう。しかし、この二つの大きな改変に直面しながらも、わが光葉会は、組織と運営を堅持したのである。八月に開かれる学会は、年々隆盛をきわめ、『国語教育研究』は、一年毎に着実に号数を重ねてきたのであった。

ところが、二十年ほど前に分離したばかりの学校教育学部との合併は、思いもかけないことであった。この改組が、光葉会

にとつて、不都合であつたのは、従来どおりの組織による運営を困難にしたからである。ここにおいて、たゆみない発展をなしてきた光葉会が、新しい組織へ移行する道を選んだのは、自然の成りゆきであつたらう。新会員のいなくなるのを承知の上で存続するのは、将来性が全く望めないからである。

三

第一委員会の理事会で、もつぱら議論されたのは、この際、発展的解消を遂げるべきかどうかの問題であつた。研究も親睦も、新しく発足する「国語教育会」に移して、継続できるではないかという意見である。しかし、この度の母校の改組については、必ずしも会員全体に周知徹底されているわけではなかつた。光葉会への愛着もあつたらうが、基盤を固めるためにも、性急に事を運ぶのは、慎まなければならなかつた。

形として光葉会を残すことになれば、今までの会長とは質を異にするにしても、世話人の代表が必要になってくる。その任には、理事の中の一輩先輩で、人格者でもある伊藤武雄氏が適任であつた。しかし、体調がすぐれないとあつて、そのお鉢が、次の年輩の、人格者でない私に回つてきたのは、いたしかたもなかつた。光葉会には、長年にわたつて育ててもらつたのであり、恩義に報いるのは、このときであつた。

四

旧教育学部の光葉会と旧学校教育学部の東雲国語会と新教育学部の卒業生の会が合体して、「国語教育会」は誕生した。当初は、いくぶん不協和音が聞こえてくるかもしれないが、すぐに三位一体の実が挙がるに決まつている。そのことは、すでに昨年八月に開催された第一回の学会でもつて、立証されたと言ふべきであらう。三者の卒業生は、たいしたわだかまりもなく研究発表を行い、質疑応答を交わしたのである。

私にして定年でもつて現役を退いてから、六年目を迎えており、新制大学第一期生の先輩は、七十歳を越えておいでだらう。光葉会が新生を図るには、むしろ母校の改組は、絶好のチャンスであつたかもしれない。光葉会は国語教育会を応援するといふよりも、その中に融和して持てる力を發揮していくべきである。「国語教育会」が四十年前の光葉会と同じように、新興の意気と熱意とにあふれることを願うや切である。